歳時世相篇

アマゾン川上流の聖週間

イエスの像が町中をめぐり、住民たちはヤシの葉をもって迎える。カトリックの重要行事聖週間の始まりだ。スペイン統治時代、修道士が伝えたこの儀式を、世俗化など社会変化が進む現在の南米で、人びとはどのようにとらえているのだろうか。

齋藤 晃
民博 先端人類科学研究部

聖週間とは

聖週間という行事のことを知っている日本人はおそらく多くないだろう。キリスト教の信者なら、イエスの受難を記念するこの重要な行事について、ひととおりの知識をもっているはずである。しかし、聖週間が伝統行事でも公式行事でもないわが国では、信者以外の人の知識は限られているにちがいない。あるいは復活祭なら、多くの人が耳にしたことがあるだろうが、イースターエッグ探しは春の訪れを祝うヨーロッパ古来の慣行に由来しており、キリスト教の典礼ではない。

聖週間とは四旬節の最後の週、棕櫚の日曜日から聖土曜日までの一週間を指しており、この間、地上におけるイエスの生涯の最後の出来事を記念する一連の儀式がおこなわれる。西暦上の日づけは毎年変わるが、三月か四月におこなわれるのが常である。聖土曜日の翌日の復活祭は、厳密には聖週間の一部ではないが、一連の儀式の締めくくりという意義をもつ。

聖週間のおもな儀式は、福音書の記述に基づくイエスの受難の演劇的再現というかたちをとる。式次第は時代や地域によりさまざまなので、以下では、わたしが一九九五年、南米ボリビア・アマゾンのモホス地方で実見した行事を紹介したい。

受難の演出

スペイン統治時代、イエズス会の管轄下にあったモホス地方には、カトリックの信仰実践が深く根づいている。聖週間は、クリスマスと守護聖人祭とともに、もっとも重要な年中行事である。聖週間の準備は四旬節から始まる。イエスの荒れ野での四〇日間の断食を記念する四旬節は、回心と償いの期間である。とりわけ毎週金曜日、「十字架の道行き」という信心業がおこなわれる。聖堂のなかや町中に掲げられた受難の場面をあらわす一四枚の絵をひとつひとつをめぐりながら、黙想し、祈りを唱えるのである。

聖週間の本番は棕櫚の日曜日から始まる。この日には、イエスのエルサレムへの入城を記念して、礼拝行進がおこなわれる。子ロバに乗ったイエスの聖像が町中をめぐり、住民たちはヤシの葉をもってそれを迎える。聖木曜日には、最後の晩餐を記念して、使徒に扮した一二人の信者に食事が振る舞われる。また、イエスが使徒にそうしたように、司祭が信者の足を洗う。聖金曜日には、イエスの受難と死が演出される。ゴルゴタに見立てた場所にイエスの磔刑像が立てられ、聖堂からそこまで「十字架の道行き」がおこなわれる。ゴルゴタに到着すると、人びとは十字架からイエス像を降ろし、棺に収める。聖像は手足が動くようになっており、容易に棺に収まる。復活祭の明け方には、復活したイエスと聖母との再会を記念して、邂逅の礼拝行進がおこなわれる。イエス像と聖母像を輿に乗せ、互いに反対方向で広場をまわり、両者を対面させるのである。

棕櫚の日曜日の礼拝行進。聖水で祝福されたヤシの葉から十字架が作られ、1年間家に飾られる（1995年撮影）

感覚的宣教

モホス地方に見られるような聖週間の儀式は、かつてはカトリック圏ならどこでもおこなわれていた。南米へのキリスト教の伝道は、一六世紀初めのスペインによる植民地化を契機としているが、その原動力となったカトリックの修道士は、視覚的・演劇的な仕掛けを積極的に活用した。修道士たちは、南米の先住民は知性の働きが十分ではなく、感覚により把握できる以上の事柄を理解できない、と考えていた。そのため、理詰めで教義を説くよりも、絵画や彫刻、音楽により視覚や聴覚に訴えるやり方を好んだ。修道士たちはこの方法を、「目に見える奥義を通じて、彼ら（先住民）の心に篤き信仰の恵みが伝わる」とか、「目から入るものが、神が内側から魂に伝えるものを活気づける」などと表現している。

聖と俗

今日、モホス地方ほど熱心に聖週間の儀式がおこなわれるところは、南米でも多くない。世俗化の流れやプロテスタント諸派の興隆、信仰実践を支えてきた共同体組織の衰退などにより、大仰なカトリックの儀式は消滅するか、さもなければ観光や芸能に変貌しつつある。聖週間に関していえば、熱心な信者以外の人にとっては、いまや日本のゴールデンウィークにも似た大型連休の様相を呈しつつある。都市住民のあいだでは、会社や学校が休みになり、バカンスに出かける者も少なくない。

このような理由で、聖週間とその前後は、宿や交通機関が混雑する。以前、聖週間直前にボリビアを旅したとき、ホテルが満室だったり、飛行機のチケットがとれなかったりして、ずいぶん苦労させられた。都市部では、バカンスにともなう民族大移動の熱気が満ちており、その熱にあてられ、やや憔悴してモホス地方に辿り着いたことを覚えている。雨季の終わりの暑苦しい夜、ホテルの二階のベランダでくつろいでいると、静寂のなか、人びとの足音が聞こえる。見下ろすと、十字架を掲げた礼拝行進がとおり過ぎるところだった。来るべき聖週間に向けて、心の準備をしているのだろう。およそ信仰心のないわたしだが、このときばかりは、修道士のいう「篤き信仰の恵み」が少しだけ伝わった気がした。